

都市に水路を、森に広葉樹を

「水の力」を取り戻せれば……

水路の暗渠化が進み、都市の景観は味気ないものになった。人の手が入らない森や水田の保水力は落ちる一方――。それぞれの土地が持つ「水の力」をもっと引き出し、生かすには？ 幅広い領域で思考を展開する思想家の中沢新一さんに聞いた。

思想家・人類学者

中沢新一

●なかざわ・しんいち 1950年山梨県生まれ。明治大学野生の科学研究所所長。『アースダイバー』『大阪アースダイバー』『野生の科学』（講談社）、『日本の大転換』（集英社新書）など、著作多数。

水路が暗渠に変わった時代

小さいころ、夏になるとよく、母の実家のある新潟に遊びに行きました。当時の新潟は、縦横に走る掘り割りによって、いたるところに水が流れる街で、お米の積み出しや北前船の寄港地として栄えたころの面影を、まだ強く残していました。夏に

なると水路の脇に植えられた柳にほんぼりがついて、とてもきれいだつたのを覚えています。都市のなかにこれほど豊かに水が流れているのを見たのは、このとき見たきりです。その水路が埋められて暗渠になり、新潟の風景が一変してしまったのを見たときには、ずいぶん絶望的な気持ちになりました。

都市の水路の暗渠化は、高度経済

成長期に入って、モーターゼーションが推進された際、全国的な広がりを見せます。

それまでの日本の都市は、水運や地盤の強化など、さまざまな観点から水路を中心につくられてきたといっても過言ではありません。しかし、一九六四年の東京オリンピックを境にして、時代は水路よりも道路を求めようになり、水路はどんどん地

下に埋められていきました。

モーターゼーションのさきがけといえば、やはり東京です。東京オリンピック以降、皇居を中心にした放射状の道路や環状線をつくるために、都心部の細い川や水路の多くがコンクリートで覆われて、暗渠化されていきました。

銀座への足は、船だった！

若いころ、東京の中目黒に住んでいたという父から聞いた話では、昔は銀座でビールを飲むのに、中目黒から船で行けたんだそうです。中目黒から船で目黒川を下って品川まで出て、そこから銀座に向かったんだといいます。

そのころ、仲間と一緒に小型のヨットを手作りして遊ぶのが流行っていたそうなんです、この行き方は、

いまからは、ちよつと想像がつかませんよね。現在の目黒川は、あるところまではわりと幅が広いのですが、途中からは完全に暗渠になってしまつていますから。

銀座のあたりはもともと海の中でしたが、時代が進むにつれて海水面が下がったために、徐々に地上に浮かび上がってきた場所です。

徳川家康が江戸に入ったころ、銀座はまだ、小さな漁村にすぎませんでした。当時は日本橋からいまの東京駅あたりにかけて、「江戸前島」と呼ばれる半島が伸びていて、家康はこの江戸前島沖を埋め立てることで、江戸の街を拡張・整備していきます。

この埋め立てによって漁を続けていくのが難しくなった漁師たちの新しい生活場所として選ばれたのが銀座でした。もつとも当時はまだ

「銀座」とは呼ばれておらず、のちに、銀を使った貨幣の生産と販売をコントロールしようと、幕府が職人たちを一カ所に住まわせたことにより、銀職人たちの「座」（職人たちの組合）が生まれ、そこでようやく、銀座という街が生まれたのです。

もともと海辺だった銀座界隈の土地は水分が多く、柔らかいので、地盤を固めるために、たくさん掘り割りを張りめぐらせて、水を逃がしていました。江戸の中心部だった銀座や京橋、日本橋といったあたりに水路が多かったのは、土地を強固にするためでもあったのです。

水辺と暮らしが調和する光景

もちろん水路は、水上交通にも活用されます。父が銀座まで遊びに出たときのヨットは、猪牙船ちよぎという、